

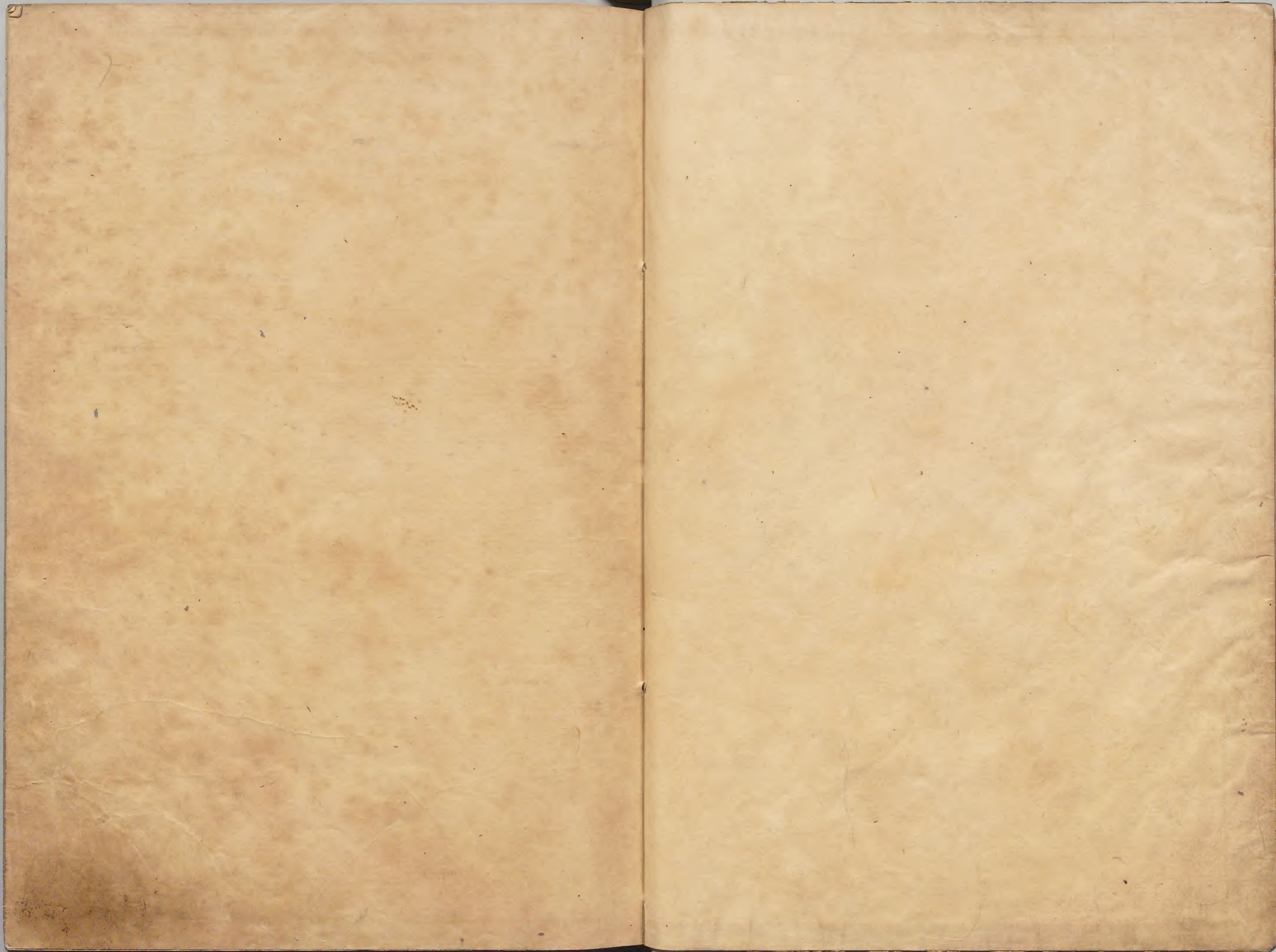
23

寛永諸家譜

清和源氏丁九冊之内
頼光流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (23)		
函號	特	76	1





池田

寛永諸家系圖傳

清和源氏

丁一

賴光流

池田

淺草文庫

家傳よりいへば賴光五代流口奉政
 と池田右馬先三号とそと反橋列の
 伯人池田九郎兼依河内新判官
 楠正行が是股の子を嗣るは
 池田十右衛門正三号と後より兵庫

助となる將軍義詮義滿の時式
勇の名をわつとそと子と依心
つひ依心子と池田あつとよそれ
より代々池田と称し掎列し若
何と
輝政こまに松平氏とたまなる但
備中守長者なりびり子孫
が名を何とあす

● 恒利

紀伊守 生國掎列
弟松俊義晴一を云つては利
媛一て宗傳の号と尾列より
て江列池田氏の娘とめたる信忠の乳
母と云なりと濃列永良の莊を経て
兼徳院の号と

● 恒貞

勝之郎 紀伊守 復又信輝とつて
刺髪して勝入と号し 出國尾列
信長の乳母子と号し 備後守
秀に流るる早崎とせしむ時高
徳人なりすれりかろがぬり信の
字とすまりりて信輝と号し信
尹武藏守信之と誅するこきその
ことをうけたまはれ武吉三人時
とるもゆへ信之のまじりやせり

を信輝廊下あきつてきりすを
川きふせく是と号しそれより國中
平安なり

弘治元年四月清次の城に織田元五
郎命に志すつた時信長海津
よりおろし合戦とこの時信輝一番
小頭とす

永禄元年七月信長岩倉に字野に
おろし合戦の時信輝大軍功

河内
信長 飯尾と名を冠へし、この時先
の軍隊敗れし、信輝敗軍乃
殊とありぬ軍と令して討る
同三年五月信長今川義元と合戦の時
信輝が謀りて大に勝利をぬり
同五年五月信長赤松貞良と徳川家
を討つた、時先は敗軍を信輝
をお款の大將頼家又右衛門

よりありあひか我とて取つたの戦を
うし取といふもはかり頼家を
討つて大利をぬり
天正八年平頼家の僧大坂の城より
こりて信長の命にあらざるに
是よりより信長無をつりて
叔年あまをせり、又志木橋津
守村守信長よりそむき村重が一
族志摩守花徳の城より指しあり

報答の賊徒花徳の加増をあるす位
輝これとせめんそく兵庫危崎の
友城(交向)一子の之助輝政と
とめた是とせめく三取の城をお
りして揚列と飲ど位輝八大坂小
后一之助ハ伊丹一后一輝政ハ
后一后一は時伝長より威状をた
まふありじきりい

武士高名越度事

揚列大坂中野寺増起の時依久間
右衛門依利陣とる事教年後の君
款城中ありおて戦ふといへども
いふと款一人も付さず京田侍
中守兵と川かきこれとをい
款と大り戦うれは付るとい
へども款なきおらりおほり
せめ来り少侍中守依わり討死
も右衛門依と款と一味たふ又は

俊也にうみとくじうこれふり
て仇之るを返投一早

池田紀伊守父子三人揚羽なび
田舎あまのるりわろく食戦の割

志づ〜も陣とふふす散せ
きこれべを記戦ひいさう

加勢の共をこふ事なりして高名
そふていわやくそ旨を安否り

領をそそ次男右新平とくに十六

歌陣一入と大に武勇をふれふ

まこといし道池田紀伊守が血筋
なり俊也が眼力にうあひてそ手拵

此れなり一皮花態の埒とせぬ
事ハ池田が力なり俊也仇之るが

こころうれく面目を失とくとも
池田父子三人のそ〜〜まに流ぬ

て會稽の軈とす〜〜名養山
うりも〜〜

池田勝九郎為年より歌りあて
一足も返りど度くの為名おとに
池水の流とらむいあなり信長嫡
子信忠次男信孝三男信雄も
池水の心腹と常にいふ心
それ虎の一毛と朽くまを
うらまふらねる名と朽くみ
朽くまをいのちとらんぞ
一代なり名を末代なり

池田といくの流とす處一と切と
執せん為り橋列一國の内徳和
朽く池田父子三人一完徳者也
向後を所々にす處一いふを
感状とす處一

天正八年八月十八日

信長判

池田紀伊守及

天正十年六月二日あけふ的智日向守光秀ひらけのとも
信長を弒せしひでゆき秀吉ひでゆき的智をうた
ため備中の陣をさししやうり上洛のた
め兵庫小总津おやえ一たふ時とき信輝ふてる
兵庫少く秀吉ひでゆきより阿比逆佐追討の
ことを相くらひ突物つげ一けるハ秀吉
の養子秀次と信輝が争いひ信輝が
次男輝政と秀吉の甥子やうしとなしと
一こちぎりて秀吉信輝とより

利發てい一先まづ信長のさしさし合戦あいくし
と山崎やまざき一とく山崎やまざき一たふ所ところはる
高山右近中川たかやま清秀ひでゆき清秀川邊ハ
勝入かちいりなり清秀先山ひでゆき一のかりてあけふ的智
が先手さきで相田あいでこたふ川がわと勝利かちをゆ
ふ時とき明智あけちが兵刃つゝの友内ともうち飛馳とび所ところ景
す、みきくると高山たかやま右近みぎちか等らいごたふ
取勝入川邊かちいりよりいふさしとせまきり
横よこあひりこれと川がわ友内ともうち飛馳とび敷

軍す勝入のよのりてこれとをい
く川一して明智決まり敷免を伝也
ゆ子松月一といふも嫡子なり柴田勝
家秀吉も親長秀吉あへて一勝入
四人の宿老天下の政道とありめ
伝忠の子と自志して國郡と群臣
一一日うちありふき後勝入揚列を
あつたため徳列を伝一大垣小居と之
物ハ波阜一任一輝政ハ池鹿一任也

同十二年秀吉伝雄に不和なりて
勝入秀吉一属一大山の城とせぬ
三月秀吉尾列一入たふ
東照大指現伝雄とすくひたふして尾
列よを發あり四月八日秀吉あへて
一勝入森氏宛守也一塔秀吉改也張
す九日の物岩海の城とせぬおこ
午の別也久手一りおぬく大合戦あ
ましく勝入うち死す時一四十九歳

後國院と号す

之物

勝九郎 紀伊守

母ハ意尾英作あきおのむすめ

花態はなごの城しろーおわく大ニ戦いくさあり

落城おちしろの信のぶ長なが威い候こうーたよりひ麻あ毛け

の馬うまを給たま与へ伊丹いだけの城しろー辰しん伯はくー

後波牟あきの城しろーうらるる也や久く手て合あ

戦いくさの時とき又またこ同どうーく討う死しす時とき母はは家いへ

由之

お羽守はねもり 母ハ母はは友とも山やま城しろ守もりが女むすめ涼りやう

利隆りりゅうが家いへ辰しん

由成

出羽守でわもり 母ハ蜂はち次つぎ賀が連れん唐たう唐たう女むすめ

光政みつまさが家いへ辰しん

元信

貞作守 母ハ塩川仰智守女
光政ガ家臣

信成

貞作守 光政ガ家臣

輝政

童名ハ右新 三丸清門 尾列清須

の城みくむる 母ハ之物り同
天正八年揚列花徳の城をせむる時
合戦枚度りかゝびて款城より働也
子輝政十六歳横倉より川にて逃
く川一款をうちとる信長うの武勇
を感悦したまひて名をたまたま
同十二年勝入と尾列より張
同十三年大垣とあらしめ岐阜の城
を領す

同年八月秀吉依く内務助成政と遊
野の時輝政こまゝに去る
秀吉紀列の賊徒を退治の時輝政
去るぐひゆきく太田の謀とあせあ
りする時輝政一方をこまゝ
同十五年秀吉鴻津退治つゝあ孫
下向の時輝政去るぐひおり
内陣の故秀吉の依りちり池田を
あつたぬ孫氏こなる

同十六年秀吉聚糸の亭にひき
時輝政を後の姓とたまり侍
候よぬ一め孝の依をも
同十八年秀吉小糸政を退治のた
め小糸の城をせむ時輝政小糸
春とくこむ時輝政をうつむと
たまり首切と威卜たまふ七月小田
原落城の故秀吉奥列よおしき倉
津陣寸輝政先陣とて奥郡を

たつぐ九月秀吉上洛の時波阜と
あゝあ三列吉田とたまりる又庄束の
糧米うて路列小栗柄の座と給る
此を奥列うて一撥起と蒲生氏
ゆととくりんがとあゝ輝政又奥列
下向と

同十九年聚米うおわく輝政又秀
吉入御の時うて此内も物と給る
又秀次より茶作との肩衝と給る

文禄三年秀吉の初めりて輝政

大指現の聲と給る

文禄三年八月十八日秀吉他界の時
走物とて吉光の眼指と給る

同五年

大指現奥列系勝退治り輝政日子
新利隆先陣うて宇野と給る
はく

大指現ハ小山一陣とてりたふ時小

石田三成謀反のつげあり急進ハ

大指現徳大ぬと河内軍陣定あり

て先奥列ととと見上方小を發

寸輝政ありびり福徳尾清門を更

正則と先陣と井伊兵部が捕獲

政本多中書忠勝と徳大ぬの目付定

す目と懸くせめのがり後河を以

三河尾張四ヶ國の人質と石田北城

一あつけおいうぎを發せ下り

村越茂物江戸より書とりらと

せきつゝ家とことなはいと

と見え振振取度と村越茂物

戸根津法合と可被後越し出

言く織志油以とて心ある

秀細口と戸山ととと

八月十三日 家康御判

吉田待流

池田保中

九鬼也

八月廿二日輝政等英濃尾張の境小
つまゆ白大河とすすむるまき汗
定わり正則なりびり西國海ハ
萩東とすすむる輝政ハ新カ納
川をすすむる汗液相とす

者より里の口よりむふこきに淺野
幸七輝政と甲くも川あり
波阜の兵三千餘新カ納村小カ
むふこきに道をふせむ輝政が兵七
千餘騎の川をたぐり川を
くくく歌陣を造る川事二里計
七百餘の首をくらり役をつりて
江戸より宿をたぬりあつて明
日波阜とせめおとす魚まきの汗定を

なとあり正則と日とをひらき
ふことといりてゆるは正則一人して
大をせしむるこふあをひき
ぬり同と女三日のありて禪政正
則より記さして水長河より海
正則いよしくいさごかりて一挙に城
をせめおとんとく七曲りせ免た
ふちるり禪政あの子らりせ免
のかり本城よりつきくきりてを立

城之織田の秀俊より百勝計あり
ふせぐ事ありて正事成ふ
法大拍秀俊の心ごとくあれひ一命
をとたしげ平流の里よりと波岸落
城の女正則波岸の城をうけるあり
とより禪政いよ城とのれあ禪
政りさきよみあゆみこあゆみ
とよりひつ新あり正則が敷新いよ
くをまさればあゆみ禪政より

まれば大敵前より取りまわりの
何れをいそやめたまひて堪忍せし
身と輝政内縁者のちなきも
一友人よりまうせ正別り候とけ
こゝろむじりい戸り預を以時
大指現よりあ度の手柄と感一を
まひ御書三通とたまるまうり
—にい—

去女二日く水鏡を伏今廿六年
刻糸急ひま川表相抱ト交
及一我教子人殺討捕波阜に
ら延付く地味人地能成はは録
者にお候水川内者左右侍入は
遠く

八月廿六日 家康御判

右田侍候

波阜く候あくは御書交御手柄

何れ書中紙一五枚中納云先
中山屋可押上由一付以我亦念
は口押可一以五枚余振内働者一
以亦亦父子内納む以之く豫之

八月廿七日 家康御判

吉田信房

徳以加友源右郎一昨今日朔日
并奈川一馬一以中納云使所取
具取公指并内陣取を惟今迄一内

手柄左紙一五枚以上を我亦父
子内納付一内働む以亦細是一
兼不能具以之く豫之

九月朔日 家康御判

清次信房

吉田信房

是く守書一紙一陣とより大垣
の城を去る

九月十日

大権現赤坂為山あかざかのみやま一ひと志御しごをこれ法将ほっしょう
とありて軍陣いくさ評ひやうをありぬ目合戦めあひけんを
とげらるる一ひと勢列せいりつをとりて
利等りとうが共南文山きなんぶんざん一ひと陣ぢんをとりて内
通つうありと之これもり一ひと河かりを好このハ
いふはゆふに輝政てるまつの南文なんぶんの陣ぢんのおま
とるべしと輝政てるまつ申上まへあがるハ祿ろくづりハ石
田淳田清いづみずみ一ひとびひておたかへん
と志しわくハのぞきこれぞ

大権現おほごんげんの信のぶ一ひと永後陣えいごぢんありまげて余あま
一ひと志しさるる一ひと河かりの上のうへに輝政てるまつ
内清うちきよ申まをす

十五日じゅうごにち冥みやうヶ原がはらあまぐ大合戦おほあひけんありて勝かち
利りをぬきまひ南文なんぶんの共ともも退たい散さん
て天下一統てんかいつうとなる

同年十月どうねんじゅうがつ軍切ぐんきり一ひと河かりを
あまぐ塙はたけをとりて

同六年正月どうねんしょうげつ大坂おほさか一ひとおわく飛ひ騨だ府ふ

衝を母飲と

日二月

右徳院殿輝政が亭へ渡河のこま右の
くつあきて沖茶をこもつる時
御奇紙子未許紙と

日八年

大指現征夷右軍に似せし西条内
時輝政少将より昇をーして
宗奥の庵紙と

日年四月後前の國と子甚忠継り
たまつ海津礼のさめはるりあし

右徳院殿内威りおほれ酒井頼宗以
忠世を上使りて在府中の糧米と
くつあきて輝政を物とまげと目見
いぞ一敷中あくお茶をたまふゆかに
及で由腰物まびは唐堂の墨蹟名
二丈を相伝と鳳凰堂毛織隣青
名成くまら上大久保加賀守忠常安友

新馬守重信と相うつし箱根を
とらせたまふ

同九年伏見よりおのゝ輝政へ

大指現渡御ありし時内川出物較百程

取給一円家来より黄金二千両を

たもちりて内河面あり

同十年五月

右徳院殿渡御ありて奈の會とまう

く内河川より銀子木と相取と同

家来より黄金吳服とたまひ

同十一年正月江戸より糸鞠して石垣

とまひり

大指現

右徳院殿よりいろく取給とことし

武蔵野のを過しきり奪場と下され

内河と内河

同六月内河の時御腰物なびり

名馬はくしり

同十二年後府の城をきりく

同年七月三日 宣旨有りて御方

内馬をくごさ侍傳奏ハ廣橋大納言

純徳寺中納言たり立入河内守使

常一にて備列一り下向一宣旨を

法よ

同十二年丹波篠山の石垣をきりく

同年西國の安宅船内禁制有りや

之も輝政一人大安宅をたまを侍

紀伊丸と号す

同十五年二月後府より

大指現へ湯一なるを時之男忠雄と漢

路の國よりなるをさきひの並一

よさきとくうしつ内いよまににおよび

て内馬内習を相伝す

同年の夏法大石に同一くぬちを

の石垣をきりく

同十六年禁中の石垣をきりく

同十七年正月輝政所寄あるふらりの
戸後府より水仗とくごされ病を
志すく水薬あり又牧野伊藤成
里橋殿兵庫物と看病のめにつ
ましく病氣申渡と八月後府より
時より本多と野分正純と上仗と
そりきとせたまふ翌日例の巻物持
て水目見つと下り水盃とくごされ
又敵申ふく宴とお月せよいとく

江戸より海路の時御茶の會とりよ
同さるあり

日二十二日江戸よりくる時り上仗
うてお井大炊利勝きり後
翌日例の巻物とくごけ水目見つ
そり後敵申ふく宴とたまふ時り
蜂谷の刀名馬二疋をたまふ南
黒麻毛と号とお月せりいとく
お月せり海べりて松平氏とたまふ

同日右田織戸と市仗よりして市前の
釜とたまりる

同日廿七日江戸をこらて九月三日
後府より江戸翌日の物市物米のともく
大指現市茶の舎あり相付ハ山名禅言
友堂和泉守高虎なり唐堂北山雲
淡とけける市茶もく右の市雲淡
と物飲も又市書院よりおろくお使心
宗の刀なりびり市馬御習と下され

榜列あく習場をゆるさ

同日十七日上洛して一昨日十八日衆
内と来議の存礼ふりりてなり

日十八年正月廿五日輝政病よりら
て榜列姫路の陣少く逝去と時
五十采國清院に号とけし河後府江
戸より使節とくこれ香真眼右
教百教とこまらる

長考

藤三郎

後中守

尾列太山少将

母八輝政一子

天正九年十二歳の時大坂におおき

秀吉の養子となり豊後氏をび小

沢原の紋の旗五本をたまわぬ

同十二年七歳一戦の時疵をう

るゆへに輝政一先立とて引退く

同十三年十六歳少将後中守

伝

同年聚采りおわく秀吉長考

考一渡御あり

同十五年薩摩陣の伝を

同十六年小田原陣の伝を

同十九年朝鮮一も陣の時肥前の

國名後尾一も陣の時秀吉を

りてな

文禄元年筑前の芦屋少将朝鮮

渡海の舟を以てなる時大般を

名馬を以てする

同三年大佛殿造営の舟を以てなる

交也三年秀吉他界の時造物を

たより家

同五年

大指現奥列系勝内退治の佐を以

てするなり関ヶ原内陣の時八月

廿二日禪政に同く新加納を渡

波阜の兵と追りト先んば浪小物

平を討掃翌日波阜の城と系崩を

これあり

大指現より御威の内書と流るるあり

—にいそく

於今度より表家先自別而致

入精自内高名子連波阜衣

系崩後新書中尸紙中納云先

中山及び押上り也尸付は我等

者 汲 げ ば 馬 市 以 来 之 物 亦 概
内 備 せ ば 之 後 々 々

八月廿七日 森康河判

池田信中守致

同年九月江列ありとせむ長米大茂
正家同伊賀守城とひひく一命
とふともく敵の強なるおろわ
中江よりおろく切腹せしむに
りりて長米が金銀財宝と云々

同年十一月因幡の國高取の城を築く

同八年伏見の城内普請と決む

同十一年江戸の御普請と決む

同十年前三郎國宗の御脇指并
水馬を相討す

同十二年後河の石垣をきつ

同十三年禁中の築地石垣をきつ

同十四年丹波篠山の石垣をきつ

同十五年丹波壱山の普請を決む

同十五年丹波壱山の普請を決む

同十九年江戸御普請をつとむ
同年九月廿四日江戸ふく病死時
七十五歳

長政

河内守 母ハ上リ同ト
禪政が姪

長明

河内守 母ハ叔父大馬助女
光政が姪

女子

森氏為守書

女子

秀次の家

女子

山崎九郎元が書

女子

浅野紀伊守室

長幸

次長清 佐中守 掾列大坂少延生
長元九年九月某に...

大権現

右院殿(御目見)時新友五九
賜指をたまふ

同十九年家督を... 周情多
の城を... 大坂陣の時天満
口をせめうこと

元和元年大坂東乱の時氏為
隆一... 天満口... おわて三
十余の首とらふ

同年没五位下に叙し侍中を
任じ

同三年因列を行く事侍中の國
松山の城を領す

同七年御馬と相領す

同年福壽正則法よりひくに

よりて改易せし侍中後任の事

三原の城より在り

同六年大坂普請を治す

寛永元年大坂普請を治す

同九年

右院殿内地界の時御造物を治す

同年四月七日に戸をおろす卒す

四十六歳

七貞

白水

輝政が家臣

七政 ななせい

下総守 しもとのまもり

利隆が家臣

七泰 ななたい

下総守

光政が家臣

七頼 ななより

助三郎

孝俊守

仕國情別

安永六年より下りて幕下り

外一統の家

寛永四年を返守り

同九年四月六日死す

七忠 ななちゆう

権平 ごんぺい

長氏

権太夫

長治

九門

帯刀

生國山城

享長十二年五采^{さい}よりとめて江戸

小下向^げ

元和三年十四采^{さい}より

將軍家御^ごを習^{まな}りしや^し流^{りゅう}ると家

同八年

將軍家上洛^{じやうらく}の時^{とき}迄^{いた}立^た位^ゐ下^り叙^ぎ

帯刀^{たいてう}と号^{ごう}しこのたひ^ひ 御^ご泰^{たい}内^{ない}の侍^{ざむらい}

年^{とし}

同年来^{こんねん}未^み地^ちと^とし^しく^くる

寛永三年加増^{かぞう}を御^ご領^{りやう}

同四年

將軍家御^ご泰^{たい}内^{ない}の侍^{ざむらい}を^を

同十一年御^ご書^{しょ}院^{いん}御^ご番^{ばん}の以^もり^り

同年

將軍家沖參内えんないの依よを

同十二年沖加増おきぞうの番地ばんちと相あひ

長常ながつね

童名ななな猿さる 出雲いづみ守まも 因よ列り為なぬをける

母はは八森やっしん貞まこと作たくらむつじとあ

安永十九年大坂内おさかうちお陣まゐの時とき六む年ねん

うして

右徳院殿みぎとくゐん一いち沖おき目め見み内うち改陣かゐりのの後ご

大指現おほさしげん一いちううみみゆ

え和わ元げん年ねん七しち采さいして活い五ご位ゐ下げに叙ぎよ

—出雲いづみ守まも一いちりり仁にむ

同二年五月

將軍家せんげんより内うち小こより令しん梨り打うちの沖おき

甲かと相あひ

同三年どうさんよりよりななるるひひりり立たちち鞠まと

たまたまととあ

寛永九年家督をつぎ佐中国松
山の城を領す

同十年出雲の國之坂尾山城守忠
晴卒すふより同年の冬より翌年

の八月まで岐國一に在番と

同十三年江戸御普請と成と

同十五年佐中国成和りに在番

て五月より翌年八月一りに

同十八年に戸紅桑山西丸の石垣と

川き市谷の普請とつとむ

長信

左甚衛 修理 佐中松山にて延守

寛永十五年幕下に在仕と

同十七年三月御書院に在番と

女子

水野の紀伊守書

女子

森内記もりうちのき書り

女子

堀七郎五郎ほりしちろうごろう書

長重ながしげ

端千代はたぢやう

長常ながつねの家の長なが

長親ながちか

森物もりもの

長常ながつねの家の長なが

女子

女子

女子

利隆

新飛 右衛門猪 中河清考がむとめ
母八中川 瀬共清考がむとめ
安長五年

大校現よ志さくひくそまつりて奥列又
を教一しきり関ヶ原内陣の先手
をたつて英徳國より川をさし又ふ
志さくひく功あり波阜の城

とせめく首救百をうらむる具り
輝政が信の中よ志るせり
同八年才忠継佐お國を領を切少
なるふりり利隆こ進ふりりて國の
まつりことととりおこをふ

同十年

右進院殿 御上洛の時侍候よ教一
右衛門猪一しきり時より貞宗の脇
指と相領と

同年

右近院殿柳原武敏左衛門康政女を御

孫子にたまはれ利隆より嫁せしめたる

青山楊摩守忠成興りての役を

たり大井大炊以利勝具揃の役を

はとむ時

右近院殿より青江の御腰抱左文字

の御脇指なりびよ御馬二疋利隆に

たまはる

同十二年江戸へ奉勅の時

右近院殿より杉平の姓をたまはり氏

為守より兼仁と時より老光のたり

本國光のりた安右の脇指をたまはる

右近の御腰抱馬二疋孫子に腰を

御代より時御倉一見のりめ頼

殿兵庫助と案内者よりておそら

家より後府よりりて

大権現よりみえて御馬御腰抱を御代より

同十三年江戸へ勅りし一由の別
旨徳院より行先の取指を母儀と

同十四年丹列藤山の普清とつむ
同年新を即延しとす

旨徳院殿へ進とすし一めされて上徳を

一て牧野をあ舟と下され御帳子

ひえ物拾銀子等を母儀一とす

彼中の内へく取銀子を新を御

母一りたまたま海

同十五年尾列那在屋の普清と勅

同十八年利隆江戸小阿り一輝政

病おころのり一とすし取賜をたまり

内國す時一者愚たを御監助光の

力と母儀も正月廿五日輝政情列娘

詔一りおわく逝去

利隆家督をつぎ情度之國とす

是より江戸後府一りてお

礼とす

右徳院殿より志津の刀をたまり
大指現より馬をくまらる

同十九年江戸御城に菅清とつむ
同年の冬大坂の陣の時厄崎より
張一神流の川をくまらる敵殺十人
を討揚それより中津川をくまらる天
満口よりくまらるみもくせめりこむ
大坂を中とわら二条の御城より

大指現

右徳院殿より一討軍勢となり
ら道銀子三千枚をたまり

元和元年大坂毎乱の時利隆大坂を
りも張一太和回殺百森と焼く
落城の白敵殺千を討ぬその頸を敵
同二年利隆江戸よりかぬく病より
ゆいぬまをたまりて上洛し着病
のくぬ殺殺傳死をけり六月十二日
卒より三十三歳身國院に号す

い時江戸より香奠して御救百救を
たまはし給

忠継下

友松 丸橋つ骨 城列伏見にてせら

母ハ

大指現のたじとあ

享長八年正月祐前のおとたまはる村よ
み業伏見の城よりおわくお礼と

大指現より香光のた脇指をたまはり
お月せり給はた子に准せりおとと
右徳院殿よりた脇指をくしり給

同十三年十業の村

右徳院殿よりくえ股一松平氏と
たまはり三郎と名づけはは位下に
叙し侍候し侍せり是は津の忠の
字とくしり給は正家の沖橋物を御
して御あは

日十八年播列完粟依用赤穂三郡を
りつて彼前いぜんの國くによりくくす
日年八月江戸後府ごふよりりて
を時とき

右徳院殿より西腰地しよのちをびり西馬しよま御
鷹たかを相飲あひのみと

同十九年江戸西城しよじやうの石垣いしきをきつ
日年の冬大坂西陣おほさかにしじん比時十月廿日
六采むつとあ強ちやう十一月七日播列大和

田川たがわ陣じんをわり川がわをこり一ひと敵てきを
追おうち二条ふたじやうの西城しよじやうへ追おうと

大指現おほさき西威しよゐなめをす城やうを教おしあり
て信しん右みぎ陣じんをりたまふ忠ちゆう継つぎをん
ぐ今橋いまはしをせじ城じやう中ちゆうより鉄炮てつぱうを打うち
事ことぬのぬの

右徳院殿ごていんをきりて鉄てつの橋はし
をたまふ家いへすかろみ橋はしと橋はしの二ふた
りたくなつづく大首おほびしをり掛かけ

取城とりしろ中ちゆうよりふせぎこころ城しろより出て
橋はしを焼やきおろす

大指現

白蓮院はくれん殿のり忠継ただつぐの忠功ただかつを感かんぜり侍

元和元年二月佐前さきよりさうり俄にやうり
病やまひをうけく廿三日卒まじり時ときより十七歳
龍峯寺りゆうそうじに号なづき江戸後府えごうふより仗衛じやうゑ
阿りて香真かうまこととてさうり侍

忠雄ただゆう

勝五郎かつごろう 新次郎しんじろう 情刃じやうじん姫路ひめぢをさる
母はは上かみより同どう

寛長十三年七月

白蓮院はくれん殿のりの御前ごぜんよりえ服えぞくの時とき松平氏まつだいら
をさうり新次郎しんじろうと名なづけ文内ぶんない
少輔しょうぶより信のぶ下した内膳うちぜん御馬ごまを治しる
同十五年淡路あわぢの國くにを相領あいにうとて時とき九
条ちゆうより四月しがつより相礼あいにうのつとめ江戸

後府よりくる

大指現より内脇指を解飲一

右徳院殿より内脇指馬を解飲を

同十九年大坂乱の時陣を今言り

よりて是をうこじ又兵をより

より流り傳浪が例をお守枝地

の大指平子之胎せきたる忠雄

が長横川次史平子とうちる又

箕浦玄者島船をよりて傳浪が例

よりるは二人より御威状をしまつ

元和元年大坂乱の時お陣を

同年七月忠継子なきふより後前

の書を解飲をばを解飲のため江戸

後府よりゆきくを物と被り

同二年正月侍流より何ぞ御必の別

一内脇指馬内脇指を解飲を

同三年二月江戸より系勅

同年七月

白河院殿御上洛の時忠雄山崎一伺
候と

同五年二月

白河院殿御上洛の時福崎正則
刑部卿をうじくおろし國を
おとすにあらざりて
徳大將あびり忠雄等
佐をうけたまはり
廣瀨一を殺す志れども
正則守りぬるに
あらず

りおよむとてさきおろし
徳大將

らびり忠雄外
越さるり上洛

て忠雄又山崎一
伺候と

同六年大坂城の石垣を
はく時侯

より大石を
外のかと

同七年三月江戸
おと福崎正則
を殺す

あびり銀子
子牧御服を
おび

由馬御
意とり

由馬御意とり

同九年

將軍家御上洛ありて將軍宣下の御

泰内えいごの時兼輿庵いんあ派はと

寛永元年大坂橋の門の石垣を築

一の大石ありたると云るよこ八石也

同三年

右徳院殿

將軍家御上洛ありて九月

將軍家二條の城へ月夜となりたまふ

時忠雄ときただ泰誠たいせい一いっひせしと馬うま少すく

庵いん派はと

同五年大坂天子寺口の石垣を築

と

同八年七月中改修卒して子なき

ゆ改修かいしゆの地未徳みとくの郡と忠雄ただ一いっ

下したなる志し進しんも輝てる沈しん輝てる具ぐが地ち

すくなくゆ二人の弟ありて一人なり

言い上じやう一いっけけと

台徳院殿 その孝友 を成ありて忠雄 が
尸ひひりしをせし海

同九年正月

台徳院殿 堯卿 の時 に是 の物 をしりて あ

麻 の御 服 をびり 銀子 をみ 干

牧 所 を し

同年四月三日 忠雄 逝 去 す 時 り 三

十一 日 清 泰 院 に 号 し 翌 日 酒 井 撰

波守 忠 勝 と 仗 し て 香 真 銀 五

百 枚 と し り し り し り

輝澄

松 氏 右 見 守 生 女 情 別 娘 路

母 上 り 申

橋 別 の う ち 完 業 依 用 友 郡 を 終

一 石 見 守 り 何 と

元 和 三 年 法 位 下 叙

寛 永 三 年 法 位 叙

大坂江戸の御著清四度^{ふしんよよ}を
はらじ

某^{なにが}

虎^{とら}物

母^{はは}ハ生^い駒^{こま}濱^{はま}波^{なみ}守^{まも}女^め

某^{なにが}

采^{さい}女^め

母^{はは}ハ生^い駒^{こま}濱^{はま}波^{なみ}守^{まも}女^め

改^{かえ}港^{つら}

宏^い松^{そう}

右^{みぎ}采^{さい}女^め

生^い駒^{こま}濱^{はま}波^{なみ}守^{まも}女^め

母^{はは}ハ生^い駒^{こま}濱^{はま}波^{なみ}守^{まも}女^め

七^{しち}采^{さい}の^の時^{とき}

大^{おほ}権^{ごん}現^{げん}一^{いつ}御^ご目^め見^み時^{とき}一^{いつ}新^{あらた}友^{とも}女^め國^{くに}光^{あき}此^{こゝ}

内^{うち}脇^{わき}指^{さし}と^とた^たま^まら^ら家^か

元^{もと}和^わえ^え年^{ねん}六^む月^{げつ}情^{なさけ}列^{りゅう}の^のう^うち^ち采^{さい}女^めの

郡^{ぐん}を^を領^{りやう}す

同^{どう}九^く年^{ねん}右^{みぎ}采^{さい}女^め一^{いつ}御^ご目^め見^み時^{とき}一^{いつ}

寛永三年 後^ご仁^に下^げり^し 叙^ぎす
大坂^{おおいさか}の^の 菅^{すげ} 徳^{とく} 三^{さん} 度^ど 一^{いつ} 通^と 一^{いつ} と^と 法^{はふ} と^と 心^{しん}
同四年 八月 卒^{すつ} 子^こ 有^あ 一

禪^{ぜん} 興^{きやう}

右七郎 右^う 左^さ 右^う 左^さ 更^ま 生^{しやう} 必^{ひつ} 日^{にち} 有^あ
母^{はは} 上^{かみ} 左^さ 下^{した} 印^{いん}

安永十九年 四^よ 年^{ねん} 四^よ 年^{ねん} 四^よ 年^{ねん} の^の 時^{とき} 一^{いつ} 日^{いち} ぬ^ぬ ぬ^ぬ
江戸^{えど} 一^{いつ} 日^{いち} 同^{どう} 復^{ふく} 也^や

右徳院殿より廣光の^{ひろみつ} 内^{うち} 脇^{わき} 指^{さし} と^と 法^{はふ} と^と 心^{しん}
將軍^{しやうぐん} 桑^{くわ} 久^く 右^う 小^こ 右^う 左^さ 下^{した} 印^{いん} と^と 法^{はふ} と^と 心^{しん}
元和元年 六^む 月^{げつ} 情^{じやう} 列^{れつ} の^の うち 依^よ 見^{けん} 此^{こゝ}
郡^{ぐん} と^と 法^{はふ} と^と 心^{しん} 一^{いつ} 大^{だい} 坂^{さか} 右^う 左^さ 下^{した} 印^{いん} と^と 法^{はふ} と^と 心^{しん}
此^{こゝ} と^と 心^{しん}

寛永三年 八^{はち} 月^{げつ} 右^う 左^さ 下^{した} 印^{いん} と^と 法^{はふ} と^と 心^{しん}
同八年 情^{じやう} 列^{れつ} の^の うち 依^よ 見^{けん} の^の 款^{くわん} を^を
好^{こう} 好^{こう} と^と 心^{しん}

同十一年 七^{しち} 月^{げつ} 後^ご 仁^に 下^げ り^し 叙^ぎ す

同十三年江戸の御着法を記す

某

五郎八 母八黒田統前守長政女

女子

女子

京極丹波守高廣が妻

女子

大権現の御養子

伊達隆興守忠宗の妻

政虎

加賀守 光政の妻

重長

依後守

同家臣

利政

橋津守

光政家臣

政信

依後守

同家臣

光仲

勝六郎

相摸守

寛永七年六月十八日武列江戸にて

延生 母ハ蛇次アハノミ阿波守アハノミ玉姫女

忠雄逝去して後光仲家督を以て

同九年六月備前イダの國を以て光因

備伯耆ヒクサキあふとていふと家討り三氣

同十一年正月五日某とていふと三島の時

將軍家よりしきぬしるまをくこれ
お紙添りて呉服又きなりびよこ荷
之程とたまりし

同十三年江戸のお着法をけし
同十五年十二月九日え服の時
お諱つとむの光あきの字とたまり相換あかひす
似せしき左文字のお脇指と相代
同十八年おいとまをたまりて初て
入國と

仲改ちゆうかい

勝三郎 母八上におか

光改あきかい

新右衛門 内列うちり岩山の城しろを延生しんじやうし時
右衛門殿より牧野まきのをあ身あみ岩山いさまより
青江あおえの刀やいば行國ゆきくにの脇指わきさしをくまを
母八

右徳院殿の内御うちご一ひと姫宮ひめのみや八や林はやし宗むね武たけ平ひら
左ひだり捕とら藤ふじ康やす政まさがはじまめ

享たの長なが十じゅう六ろく年ねん三さん某まい一いつててりり一いつりりててははりり
下した向むか一いつ式しき法ぽうのの書ま物ものををままげげてておお礼れいをを

時とき

右徳院殿うでいんより来きた國くに後ごのの昭あき指さしをを得とりり

同十八年どうじゅうはちねん六む某まいの時とき

大おほ権けん現げんより新あらた某まいのの昭あき指さしととゆゆら

元もと和わ二に年ねん利き隆りゅう率りつとといいひひひひ戸こ一いつ枝え

露つゆとと翌あした日ひ酒さけ井い報ほう未み以も忠ちゆう世せ土つち井い大おほ物もの以も
利き勝しょうとと上う役やく一いつてて一いつ一いつけけふふきき
上う意い一いつてて取と智ちををつつきき情じゆう摩ま此こゝ國くにと
たたままふ

同三年

右徳院殿うでいん上う洛らくの時とき克かつ政せいハハ江え戸こ一いつ
左ひだり何なにとと備び列れつをを阿あ一いつ一いつめめ周しゆう情じゆう伯はく者しや
友とも國くにををままふ

同三年どうさんねん二に月げつ内うちいいととままととたたままりり物もの

て入内の時

右徳院殿より國後の内刀なりびり
水馬とたまたま

同六年

右徳院殿内上洛より光政京都よ
伺候す一内文字の刀と候

同六年大坂内普請と候とむ

同年江戸より糸鞠一翌年内國の村
内文字の刀と相候と

同九年

將軍家内上洛ありて將軍宣下の内
糸肉の内光政侍候より内々連糸
輿扈内と内一内澤の内光の字と候
内繩の刀と相候と
寛永元年大坂内普請と候とむ

同三年

右徳院殿

將軍家内上洛ありて九月六日二葉の

山城へ月夜の時が将より似せられ
馬りて扈衛と

同五年

台徳院殿の清涼女を嫁せしめたまひ
水娘より同くきりのお侍せま
正宗の由り志津の由指と相成と
け時

將軍参りり舟参の由りとくま
同年大坂の由普徳と成とむ

同六年

台徳院殿より業師寺の肩衝と相成と

同九年正月

台徳院殿御地界の時由是地より
銀子六千枚たまりり同母成福正院へ
金子百枚銀子千枚たまりり同養中
へ金子千枚くまりり

同年四月徳前のおまゝ忠雄薨と先改
同情伯耆を所たぬ徳前の國并に

佐仲牧郡と領ぞ入おりおらびて

將軍家より國次の御刀と相領す

同十年江戸より奉勅と六月

將軍家 天壽院殿一渡御の時光政同

領すは時則守の御刀と相領す

同十一年

將軍家の上洛の時光政奉勅し御領す

同十三年江戸御普請をつとむる時

長光の御刀と相領す

同十六年江戸より奉勅して御領す

銀子吳服良馬とくまらる

同十九年五月廿一日

竹千代君より奉て三丸 天壽院殿一渡御

の時光政より御領すはこれ守家の

刀と相領す

同廿日御領すはをたふりて御領す

將軍家より御領すは御領す

竹千代君より御領すは御領す

垣元

三五郎

佑後守

佑前守 山の城

誕生 母ハ上リ母

元和元年五采まきよりめて深
下向すして海次みつぐりおろく

大指現

右徳院殿（すくなく）時

右徳院殿より中堂ちゆうどう東の西にし指さしを殊こと

領りやうとと垣かき

將軍家（すくなく）見えたると時

寛永五年（すくなく）後五位下ごごいかげに叙ぎよし 佑後守

一 領りやうとと垣かき

右徳院殿より別守べつしゆの西にしと相あひま見みし

將軍家より通とほ光あきの西にしと相あひま見みし

同十一年

將軍家より上かみ洛らくの時とき京都きやうと一 同どう儀ぎ

女子

松平封馬守忠を嘉

改貞

氏戸少輔

光政家臣

集

三尾清門

寛永十五年正月六日武列江戸城下

おく延生母ハ天秀院殿本多中誓

忠刻可りしりしす時の内娘あり

同十六年三尾清門二歳して天秀院殿

一おうひしりめく

將軍家(まふゆ)

同十八年六月

將軍家 天秀院殿(清洲)の付御状一

て来國光の内照指と相成り

同十九年正月五歳まゝくし海老の

こと

將軍家よりいさぎぬとよと下されぬ
祝儀よりして之を之程とたさる

同月

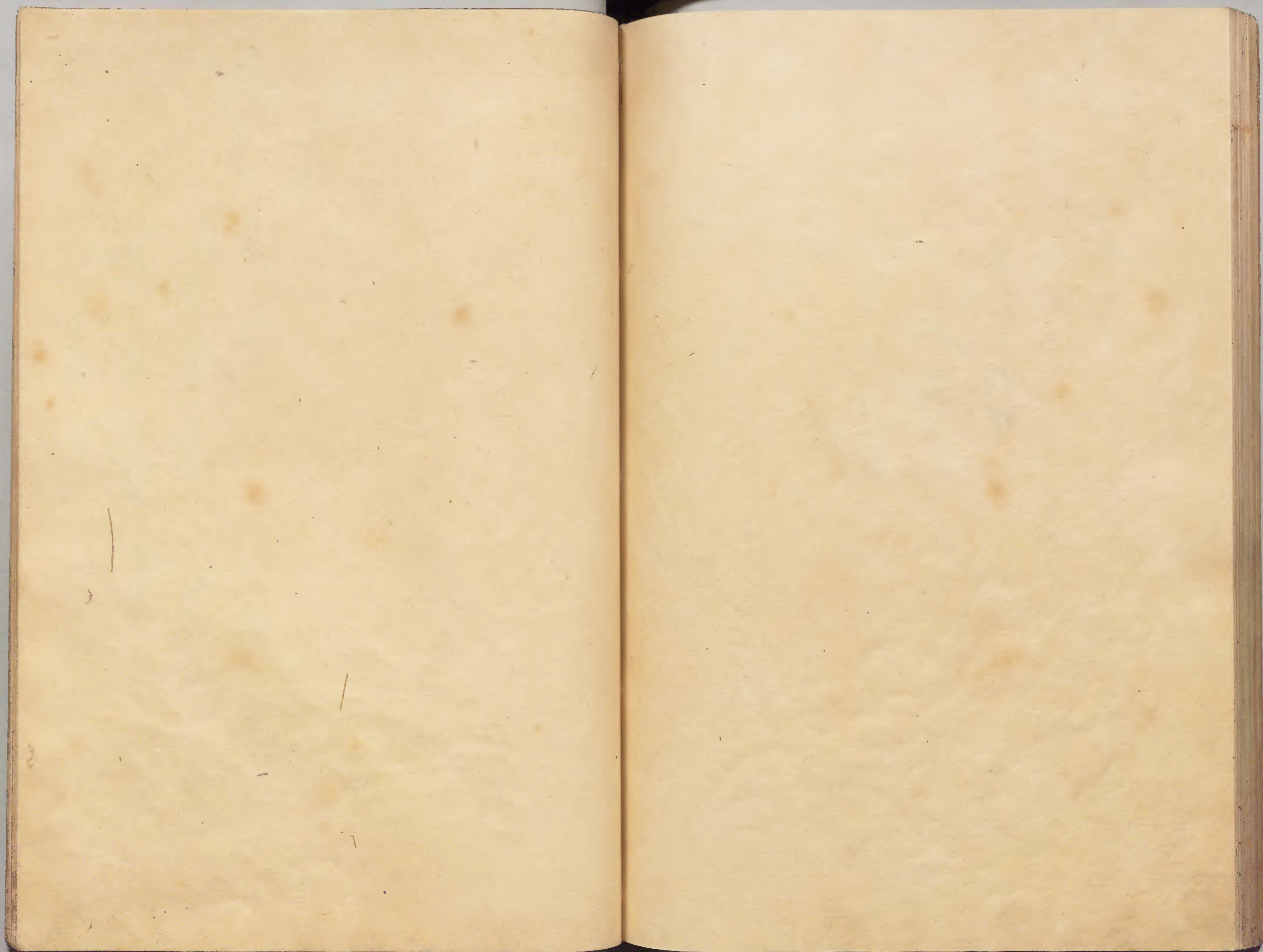
竹千代君 天秀院殿へ渡御の時之儀
伺儀すり先の御指とくさる

女子

女子

女子

家級上羽蝶



● 重利

池田

そとさき三佐源頼政が族なり

越前守 くらめ下間按察使三号に

母方の氏を流しぐりたれく池田を

号と松平三九清村ありく武蔵守

一属と下間も又源氏なり

享和十九年五月駿府よりして

東照大指況よまふえたるもつら

同九月大坂兵乱のりーとて揚列

より巨海よおりひきあ年の内陣の

るこく是とまらる知れ一可る

領

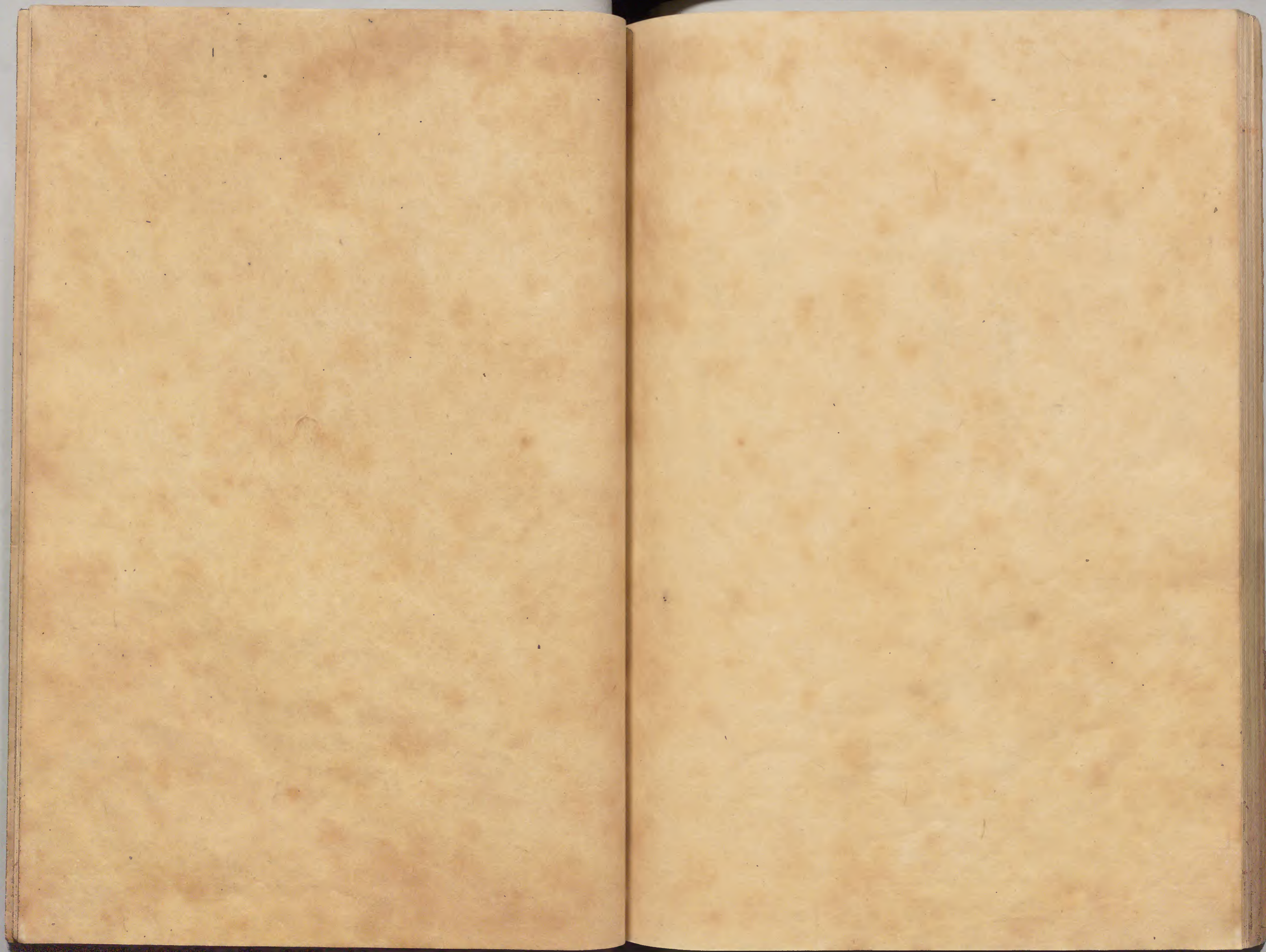
重改

内務卿

元和元年四月

右徳院殿と相賜

池田家紋拵
下間家紋蝶



池田

● 重成

久太郎

佐治守

出立掛列

掛列 久太郎 佐治守 のうら 神田村 細江村

うら 二千七百八十餘石と云々

織田信長の命にうら 志本 掛津守

村重 一 属 一 て 与力 一 一 村重 敗

亡の後者重成とありしは、
神田村細江村を領して流五位下に
叙し、佐後守に任ぜし後

東照大権現より流しとあり

享長五年奥列陣より佐守のあり

上方の騒動より

大権現小山より上方へ津進教のあり

し、津陣の後津加増ありて五

千百余石の地を領す

同八年病死

重信

赤石清門 佐後守 長門前

文守成と同く考あり

享長五年奥列陣の村守成と同

く佐守あり

同八年

大権現の命により父の遺跡をつぎ

五位下に叙し備後守に任ぜし後
後列府中にひかりの神子ありを
たがしして金銀をおぼくしり
守信の家人買取八郎も又り
是を取ふその後金銀を
わしり神子に延年を命じ
るしりられ我ら取の金銀は
くく取八郎お世をとりて神子
りしにいさ進なりといふあり

事と守信も志るしきのうと
いふあり

大権現の尊神阿そとされ江戸
一もたまた守信位を後府
を御のほこのとの評儀あり
守信いさ志るのひのちきり
祈状をさしめゆくの罪をまぬ
ことども進祈ししる罪より
内勅氣をうり取を没収せ

そのうち

大指現と道と何とれいふひて重信ちかぶ
回領まわりりの古米ふるこめなりひり家財けざい等とて
富士ふじのふりし法念寺ほつねんじより菴居あまゐりと
大坂おおさか支度しどの内陣うちじんよりおほせふりて
有馬ありま玄蕃げんぱん以長もちなが氏うぢに属まゐりて
地ちよりおしひり大坂おおさか内陣うちじんは
大指現おほさき志しより内不例うちふれいの内氣うちき又またある
つわりより内前うちまへよりおほれり

寛永六年五月十九日病死びやくじ法名道休だうしゅう

重長ちかなが

久ひさん清きよら 生なまむ指さし列りょう

父ちちと小こもに流浪りゅうろうして有馬ありまを氏うぢり

つぎ志しよりふそ氏うぢ重長ちかながが事ことと酒井さうわい

雅采みやと以忠世もちよなりひり大指おほさき正天海ただあまと

りりて言上ごんじやう志しくれむ正ただふらら丸まる免めんと

りり

寛永十一年より

將軍家（一）より

同十二年（二）内小姓（三）より

同十五年（四）御用切米（五）より

家（六）級（七）三木（八）凡（九）

